第2次都立動物園マスタープラン

葛西臨海水族園　推進計画

令和5年3月

東京都建設局

目次

１．推進計画について
（１）推進計画策定の考え方
（２）計画の見直しについて

２．葛西臨海水族園について

３．各園基本方針
（１）園の取組の方向
（２）目指す姿ごとの方針

４．飼育展示計画
（１）飼育展示計画とは
（２）飼育展示計画におけるエリア区分と飼育動物の分類
１）飼育展示計画におけるエリア区分の設定
２）飼育動物の分類
（３）園の飼育展示コンセプト
（４）エリアごとの計画　～展示コンセプト・飼育動物・重点的取組～

５．教育普及計画
（１）教育普及計画とは
（２）教育普及テーマについて
（３）園の教育普及コンセプト
（４）教育普及テーマごとの計画　～取組計画・主な実施項目～

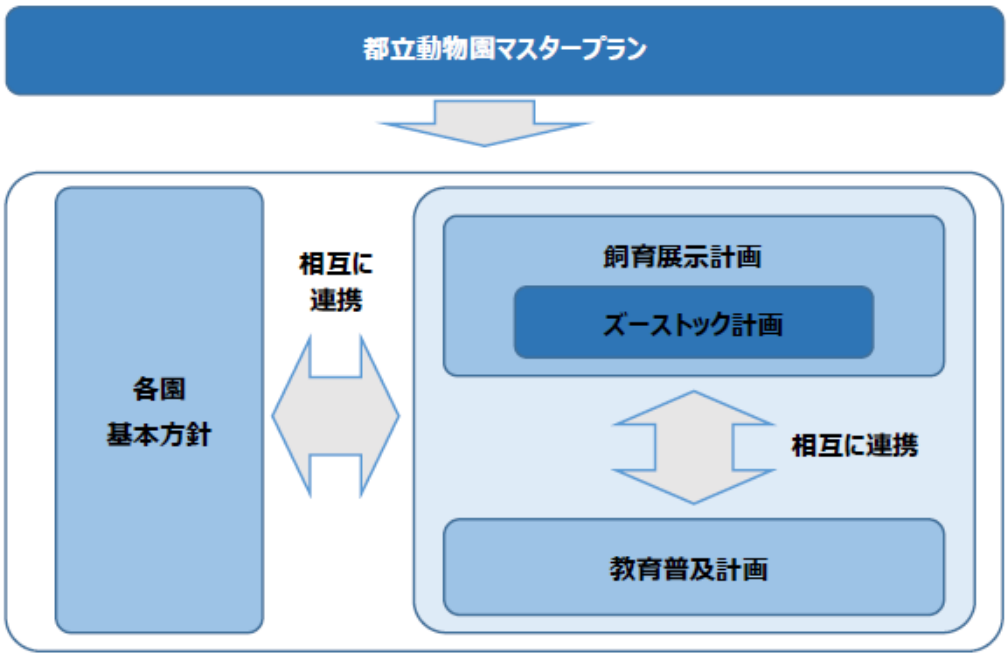
１．推進計画について

（１）推進計画策定の考え方

都は「動物園・水族館の持つ４つの機能を強化していくこと」と「持続可能な開発目標(SDGs ： Sustainable Development Goals)の達成に寄与すること」という２つの基本的な考え方を踏まえ、令和２年 11 月に都立動物園の目指す姿と取組の方向性を示した第２次都立動物園マスタープラン（以下、「マスタープラン」という）を策定しました。

マスタープランでは、その下位計画として、各園の取組の方向性や、具体的な内容を取りまとめた「各園基本方針」、「飼育展示計画」、「教育普及計画」を策定し、都立動物園の４つの目指す姿（魅せる・伝える・守る・極める）の実現に向けた取組を進めることとしています。

この度、マスタープラン 第４章「各園の目指す姿と取組の方向」を踏まえ、第２次計画期間(令和３～12 年度)中の、葛西臨海水族園の下位計画を取りまとめ、「葛西臨海水族園 推進計画」として策定しました。今後、本推進計画の取組を着実に推進していくことで、葛西臨海水族園におけるマスタープランの目指す姿を実現するとともに、野生動物の保全と環境への理解を促し、人と動物がともに生きていくことのできる地球環境を守り、未来に引き継いでいきます。



マスタープランにおける下位計画(推進計画)の位置づけ ※マスタープラン p.17 抜粋

※ズーストック計画：平成 30 年 10 月策定。124 種を対象に、希少種の保全や、環境学習の推進、生息域内保全への貢献を図る計画

（２）計画の見直しについて

本計画は、社会情勢や、国内外の動物管理計画などの変化を踏まえ、中間年度を目途に見直しを検討します。

なお、現在の水族園は、開園後 30 年が経過し、老朽化やバリアフリー等の課題があることから、隣接する場所に新たな水族園を建設し、機能を移すこととしました。令和４年 12 月に、施設の設計・整備・維持管理を行う民間事業者と契約を締結し、令和９年度の開園に向け、新たな水族園の整備に取り組んでいます。本計画についても、新たな水族園の整備内容を踏まえ、見直しを検討します。

２．葛西臨海水族園について

葛西臨海水族園は、楽しみながら海の自然への認識、水族(水生生物)についての科学的認識が培われる、「海と人間の交流」の場とすることを目的として、平成元(1989)年に恩賜上野動物園の中にあった水族館を移転・拡充して、開園しました。

「生態」から「食育」まで楽しく学べる水族館を目指し、世界ではじめて外洋性の魚の群泳を実現したクロマグロの大水槽をはじめ、100 羽を超えるペンギン、世界各地から集められた多種多様な生き物、「東京の海」の魚類を展示しています。屋外には、池沼、渓流などを再現した「水辺の自然」が広がり、東京の水辺から、北極・南極を含む世界各地の多様な生物をその環境とともに展示しています。

３．各園基本方針

（１）園の取組の方向

マスタープランで定めた葛西臨海水族園の目指す姿（マスタープラン p.108 参照）を踏まえ、園の今後の取組に対する考え方を「園の取組の方向」として以下のとおり定めました。

○ 日本をリードする水族園として、飼育や繁殖技術の発展に寄与するとともに、他施設と協力して希少な野生生物の保全に努めていきます。

○ 東京湾を臨み、ラムサール条約登録湿地に近接する立地を活かし、地元や周辺施設と連携しながら、海の恵みや環境を都民に伝えるプログラムを推進していきます。

○ 海外水族館とのネットワークや国内外研究施設と連携した調査・研修、技術交流、収集計画を推進していきます。

○ 定期的な展示の見直しと快適な観覧動線の整備、園内サービスの改善をおこなうことにより、多様な来園者に喜ばれる、利用者満足度の高い園を目指します。

（２）目指す姿ごとの方針

「園の取組の方向」に基づき、都立動物園の目指す姿（マスタープラン p.15 参照）ごとの視点から整理したより具体的な方針を、「目指す姿ごとの方針」として定めました。ハード面とソフト面の両方の視点を踏まえることで、目指す姿の効果的な実現を目指します。

魅　せ　る

○ 定期的な常設展示生物や海域の見直しを行い、展示変更や設備改修、新規展示による魅力向上の取組を継続して行っていきます。

○ 多様な来園者に対応するための案内サインの多言語化、職員の語学研修や園内レストランで提供する食のバリアフリー化など、快適に入場、観覧、施設利用していただける仕組みを整備していきます。

○ オンラインによる講演会やリモートプログラム、YouTube 動画配信、ライブ配信などを積極的に推進していきます。

○ 東京ズーネットや SNS などのツールによる情報発信を推進していくために、設備の見直しを図ります。

○ 地域と連携した防災訓練や BCP 訓練を継続し、救急救命講習の徹底などにより、緊急時の対応力を向上させます。

○ 江戸川区や東京湾に面した臨海公園という立地を活かし、近隣施設や地域と連携した取組を強化していきます。

伝　え　る

○　「いきもののミカタ」プロジェクトとして、すべてのプログラムで環境学習的なメッセージを発信すると同時に、幅広い年代から年齢別までターゲットを絞った各種教育プログラムを実施し、評価しながら改善し、発展させていきます。また、オンラインプログラムも、積極的に推進します。

○　希少動物の生息域内、域外保全の取組については、保全講演会や観察会などを開催し、積極的に情報を発信していきます。

○　「ふれあい」に変わる体験型展示(イキモノマヂカ)を整備し、新たなプログラムを開発・実践していきます。

○　身近な自然体験につなげるフィールドプログラムを近隣施設とも協働しながら推進します。

○　学校団体や教員を対象とした教育活動など学校との連携を強化し、事前事後学習の教材の開発や学年別の学校団体向けプログラム、教員研修など実施していきます。

○　特別支援学校や障害者施設、水族園に来られない方向けのプログラムや移動水族館事業を推進し、誰もが利用できる水族園を目指します。

○　シニア層や多様な技能をもつボランティアとの協働を推進し、活動の場や機会を提供し、様々な情報を発ししていきます。

守　　る

○　JAZA※1や他園館等との連携により、希少野生動物の計画的な施設間移動をおこなうことにより、持続可能な個体群づくりを進めます。

○　開園以来、定期的に取り組んでいる展示計画の見直しを引き続き行っていきます。

○　ズーストック種の飼育技術の開発に積極的に取り組んでいきます。

○　研究機関等との連携により、海鳥等の様々なエンリッチメントに配慮した展示を行い、アニマルウェルフェア※2（動物福祉）（以下、「アニマルウェルフェア」という）を向上させていきます。

○　都内および東京湾周辺施設との連携により、身近な野生動物の保全や調査に取り組んでいきます。

極　め　る

○　これまで培った飼育繁殖技術をさらに発展させ、飼育や繁殖が困難とされている種にチャレンジしてきます。

○　展示水槽や飼育動物を利用した大学などの研究者との共同研究を推進し、得られた知見を積極的に学会や研究会などで共有していきます。

○　環境省、JAZA 等と連携はもとより、協定を結んだ大学や研究機関との連携を深め、野生生物保全の取組を強化していきます。

○　連携協定を結んでいる国立研究開発法人 水産研究・教育機構との連携を深め、その連携活動の成果や研究成果について、講演会、機関誌等での情報発信をさらに強化していきます。

○　環境保全の取組として、ワンウェイプラスチックの削減を率先して行い、展示においても海洋プラスチック問題を啓発していきます。

○　これまで築き上げた国内や世界各地の水族館や研究施設とのネットワークを活かした収集活動、動物交換、技術交流や人材交流などの協力体制を推進していきます。

※１　JAZA：公益社団法人日本動物園水族館協会

※２　一般に「個体が幸せであると主観的に感じる状態」[1] とされているが、動物の主観的状態を理解するのは困難であるため、本計画では「その動物にとって、科学的に妥当な飼育管理」と定義する。

[1] Hosey, G., Melfi, V. and Pankhurst, S. (村田浩一, 楠田哲士監訳, 2011): 動物園学. 221. 文永堂出版, 東京

４．飼育展示計画

（１）飼育展示計画とは

「目指す姿ごとの方針」のうち、主に「守る」、「極める」で定めた方針に基づき、「何のために、その種を飼育し、展示し、どのように活用し、何を伝えていくのか」を定めたものが飼育展示計画です。園のエリア区分や動物舎ごとに、展示コンセプトを設定し、それに基づいてどの種を飼育し、主にどのような取組を重点的に行っていくのかを記載しています。

飼育展示する動物を、その意義や必要性に応じて整理し、それに沿った取組を推進することで、限られた施設や資源を有効に活用し、持続可能な飼育展示や野生動物保全への貢献、教育普及効果の向上を目指します。

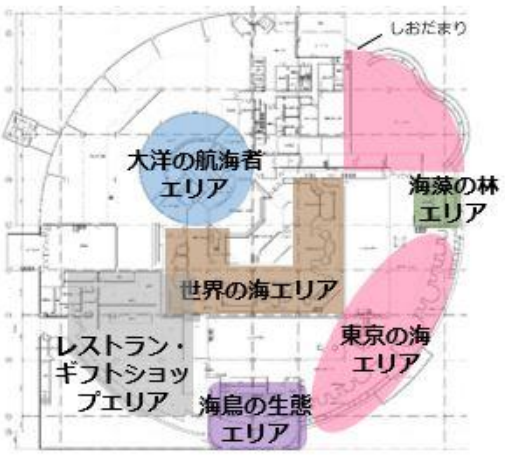
（２）飼育展示計画におけるエリア区分と飼育動物の分類

１）飼育展示計画におけるエリア区分の設定

飼育展示計画におけるエリア区分は、マスタープランに記載されたエリア区分を基本として設定しています。なお、展示コンセプトや飼育動物に応じて一部、小区分を設定しています。

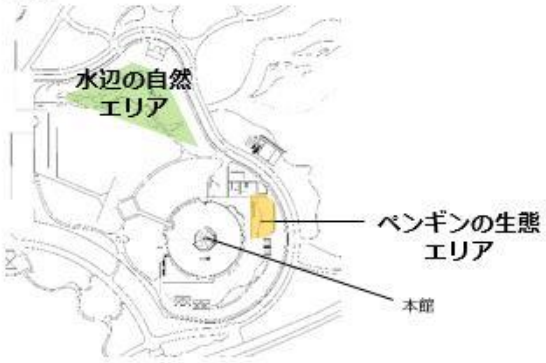
エリア区分及び小区分

本館１階



本館２階

屋外



<table>
<tr><th>場所</th><th>エリア区分</th><th>小区分</th></tr>
<tr><td rowspan="8">本館 1 階</td><td rowspan="3">世界の海エリア</td><td>世界の海</td></tr>
<tr><td>深海</td></tr>
<tr><td>極地</td></tr>
<tr><td colspan="2">海藻の林エリア</td></tr>
<tr><td rowspan="2">東京の海エリア</td><td>渚</td></tr>
<tr><td>東京の海</td></tr>
<tr><td colspan="2">海鳥の生態アエリア</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">大洋の航海者エリア</td></tr>
<tr><td rowspan="3">本館 2 階</td></tr>
<tr><td colspan="2">サンゴ礁の海エリア</td></tr>
<tr><td colspan="2">情報資料室・レクチャルームエリア</td></tr>
<tr><td rowspan="3">屋外</td><td colspan="2">ペンギン生態エリア</td></tr>
<tr><td colspan="2">水辺の自然エリア</td></tr>
<tr><td colspan="2">移動水族館エリア</td></tr>
</table>

２）飼育動物の分類

エリア区分や動物舎ごとの展示コンセプトを踏まえ、全ての飼育動物について、長期的な視点で飼育動物ごとに保全の優先性、展示効果、教育普及効果、アニマルウェルフェアの確保、搬出入の見通しといった観点から、その意義や必要性を検討し、以下の４つのカテゴリーに分類しました。

なお、野生での生息状況や飼育管理技術の向上など状況の変化により、必要に応じて飼育動物の分類を変更していきます。

・優先種：優先的に保全・繁殖に取組む必要性、または展示・教育普及上の意義が高く、特に積極的に飼育展示に取り組むべき種

・維持種：単性飼育や必要に応じた繁殖など、それぞれの種の状況に即した管理を行いながら、長期的に継続して飼育展示を行う必要性がある種

・検討種：新規導入を検討する種又は飼育展示の終了も含め検討を要する種
①展示効果や保全、教育普及上の意義などが見込まれ、今後新たな導入について検討する種
②搬出入の見通しや、アニマルウェルフェアの確保などの観点から、今後の継続的な飼育展示について終了することも含め検討する必要がある種

・断念種：搬出入の見通しや、アニマルウェルフェアの確保などの観点から今後、継続して個体を維持していくことが困難であり、順次飼育展示を終了※していく種

※ 将来的な繁殖可能性や飼育スペースの確保、個体の年齢など様々な要因を考慮し、園での終生飼育や、他施設への搬出など、それぞれの個体に適した方法を検討した上で、それに応じた適切な時期に飼育展示を終了していく。

（３）園の飼育展示コンセプト

葛西臨海水族園における飼育展示の考え方を、以下のとおり「園の飼育展示コンセプト」として定めます。

○海と人の交流の場として、誰もが楽しみながら、水生物との関係を科学的に理解することを目指します

○これまで蓄積してきた技術・知見や、関係機関との連携により、飼育や繁殖が困難な種について、技術の開発・向上にチャレンジしていきます。

○ペンギンや海鳥はじめ、様々な展示生物に対し、アニマルウェルフェアに配慮した展示を行い、エンリッチメントに取り組んでいきます。

○海外の水族館や環境省、JAZA をはじめとした国内外の関係機関等と連携し、水生生物の繁殖及び保全活動の取組を強化していきます。

○大学などとの共同研究を一層推進し、得られた飼育繁殖技術などの知見を、学会や研究会などの場で発信していきます。

（４）エリア区分ごとの計画　～展示コンセプト・飼育動物・重点的取組～

【世界の海エリア】

▶世界の海

（主な施設・水槽）

カリフォルニア沿岸、カナダ西岸、南シナ海、ハワイ沿岸、チリ沿岸、グレートバリアリーフ、北太平洋、インド洋、紅海、地中海、北海、ブラジル沿岸、南アフリカ沿岸、カリブ海

▶飼育展示コンセプト

〇深く広大な大洋に阻まれ、それぞれの海域に適応した固有の生物を展示し、海の環境やそこにすむ生物の面白さを伝える

〇寒流が運ぶ豊富な栄養が育くむ海の豊かさと、そこに生息する多様な生物の展示を通して、地球環境の大切さを伝えていく

▶主な飼育動物

優先種：メガネモチノウオ、ピコロコ、ナーサリーフィッシュ、ウィーディシードラゴン、キアンコウなど

維持種：シャイナーサーフパーチ、チューブスナウト、セイルフィンスカルピン、タマカイ、コショウダイ類、ティンカーズバタフライ、ペスチャンチョ、ミドリフサアンコウ、ゴマハギ、シモフリタナバタウオ、アラビアンエンゼルフィッシュ、オニダルマオコゼ、クレオールフィッシュ、ペインテッドコンバー、ランプサッカー、ワイドアイドフラウンダーフィッシュ、ルックダウン、クィーンエンゼルフィッシュ、バターハムレット、ロックビューティー、スポットフィンホグフィッシュなど

検討種：①ガリバルディ、スジアラ、レインボーフィッシュ、テングカワハギ、カマスベラ、ギチベラ、トランペットフィッシュ、ノーザンフェザーダスターワーム、クサビライシ、フリソデエビなど

②リーフィシードラゴン、ハワイ産固有種

断念種：なし

▶重点的取組

○世界の水族館や研究機関と連携した、各地の固有種や特徴ある展示生物の確保

○リーフィシードラゴンやキアンコウなど、飼育や繁殖が困難な生物の継続展示へのチャレンジ

○チューブスナウト、ワイドアイドフラウンダーフィッシュなど、特徴的な形態を持つ生物の展示

○バターハムレット、スポットフィンホグフィッシュなど、特異な繁殖生態を持つ生物の展示と、教育プログラムの実施

▶深海

（主な施設・水槽）

深海の生物

▶飼育展示コンセプト

〇「暗い」、「冷たい」、「水圧が高い」という深海に生息する生物の展示を通し、深海という環境や、そこに住む生物の不思議や面白さを伝える

〇深海の環境に適応した生物の生きた姿を展示し、その特徴や、独特の泳ぎ方などの生態を観察できる機会を提供するとともに、その採取や飼育の難しさを伝える

▶主な飼育動物

優先種：サケビクニン、キンメダイ、ムツ、メダイ、タカアシガニ、マトウダイ、スポッテッドラットフィッシュなど

維持種：サギフエ、ミドリフサアンコウ、オキナマコ、テヅルモヅル類、ゲンゲ類、ベニズワイガニ、ユメカサゴ、ノコギリザメ、ヒメ、アカザエビなど

検討種：①シャチブリ、オオメハタ、コンゴウアナゴ、アバチャン、ハマダイ、アオダイ、アカタチ類、カイロウドウケツ、ボウズボヤ、オオエンコウガニなど

②ミツクリザメ

断念種：バラムツ、パラオウムガイ、ハナビラウオ、ギンメダイなど

▶重点的取組

〇深海という極限の環境に適応した特徴的な生物の展示

〇収集や飼育が困難な深海生物の、収集方法や飼育技術の開発

〇他機関や漁業従事者と連携した深海生物調査

深海をイメージした展示エリア

深海の生物を展示した水槽

▶極地

（主な施設・水槽）

南極、北極

▶飼育展示コンセプト

〇北極海や南極海という超低温の過酷な海にくらす固有な生物を飼育下で維持し、展示することで生物の多様性を伝える

〇生体展示に加え、解説パネルや標本展示により、過酷でダイナミックな極地の環境を間近に感じられる機会を提供する

▶主な飼育動物

優先種：アークティックスパイニーフランダーフィッシュ、グリプトノータス　アンタークティクスなど

維持種：ブルヘッドノトセン、ダスキーノトセン、アークティックコッド、ナンキョクバイ、アカキタトサカ、シャンデリアクラゲなど

検討種：①なし

②コオリウオ類

断念種：なし

▶重点的取組

○他機関や水族館と連携した極地生物の収集・展示を通して得られた、知見の普及啓発

○極地における環境変化と、地球温暖化に関する情報の発信

「北極・南極の海」コーナー

アンタークティックトゥースフィッシュの標本

【海藻の林エリア】

（主な施設・水槽）

海藻の林

▶飼育展示コンセプト

〇大型褐藻であるジャイアントケルプなどが茂る藻場に生息する魚類を中心とした展示を通して、多くの海洋生物のすみかであり繁殖の場でもある重要な環境要素の一つとなる、藻場の重要性を伝える

▶主な飼育動物

優先種：大型褐藻類（ジャイアントケルプなど）、ブルーロックフィッシュ

維持種：ペインテッドグリーンリング

検討種：①小型ヤドカリ類、フリンジヘッドの仲間

②オーカーシースター、レッドアバロネ

断念種：ケルプクラブ、ロックグリーンリング、ノーザンフェザーダスターワーム

▶重点的取組

〇ジャイアントケルプなど飼育が困難である大型褐藻類の飼育技術の開発

〇カリフォルニア沿岸に生息する生物の安定的維持

「海藻の林」水槽のジャイアントケルプ

「海藻の林」水槽のペインテッドグリーンリング

【東京の海エリア】

▶渚

（主な施設・水槽）

渚の生物、しおだまり

▶飼育展示コンセプト

〇東京湾内湾の浅い磯の環境から陸地までを再現し、岩場やガラ藻場などの環境を利用してくらす生物や海浜植物を展示することで、わずかに残る東京湾の浅瀬の海や磯の多様な環境を再現し、そこに生息する生き物の暮らしを伝える

○岩穴や岩のすき間などを巧みに利用してくらす生物や、岩に強固に固着して身を守る生物などを展示し、来園者に見つけてもらうことで、磯遊びの楽しさを伝え、実際の海へ誘う場を提供する

○職員の解説により、ヒトデやウニなどの身近な生物を観察し、実際に手で触れることにより、見るだけではわからない生物の体の構造や、面白さを伝えるとともに、実際の海に行った時に、海の生物の正しい触り方や危険な生物を理解してもらう

▶主な飼育動物

優先種：ボラ、カサゴ、メバル、クロダイ、カワハギ、クサフグ、キタマクラ、キュウセン、ハオコゼ、ゴンズイ、イセエビ、イトマキヒトデ、ムラサキウニ、マナマコ、トコブシ、ホンヤドカリ、マダコなど

維持種：ドチザメ、ネコザメ、ホシエイ、アカエイ、ニザダイ、マダイ、オハグロベラ、ハコフグ、ナベカ、カエルウオ、コアマモなど

検討種：①ダツ類、トラフグ、ネズッポ類、ホラガイ類、フジツボ類、カメノテ類
②マダイ（大型）

断念種：ウツボ、コブダイ、ヒラメ、シロギスなど

▶重点的取組

○メバルやクロダイ、カワハギなど、食卓にも上る身近な浅い海の生物の展示による普及啓発

○「しおだまり」コーナーで生物の体の構造や身の守り方、見つけ方、注意点などを職員による解説により楽しみながら学べるガイドを実施

「渚の生物」水槽の潮だまり

磯で見られる生き物たち

▶東京の海

（主な施設・水槽）

小笠原の海、伊豆七島の海、発光生物、東京湾アマモ場、東京湾の漁業、東京湾にもいるこんな生物、東京湾運河、東京湾泥干潟、浮遊生物、葛西周辺のカニ、葛西の海、アサリの浄化

▶飼育展示コンセプト

〇葛西臨海水族園の位置する東京湾奥の運河や干潟から湾口、磯など、東京湾のさまざまな環境を再現した展示を通し、今も浅瀬に残るアマモ場や干潟などの重要性を伝える

○周辺の博物館施設などと協力して、ラムサール条約登録湿地である葛西沖の干潟で地引網調査やベントス調査などを実施し、季節によって変わる出現生物を紹介するとともに、干潟や浅瀬の重要性を伝える

○大島から八丈島までの伊豆諸島周辺海域でみられる生物の展示や小笠原諸島にすむ固有種を展示し、それぞれの海域の特徴を紹介する

▶主な飼育動物

優先種：ユウゼン、レンテンヤッコ、ヤマブキベラ、ヤセタマカエルウオ、テングダイ、アカイセエビ、コブセミエビ、キンメモドキ、キンギョハナダイ、ヤギ類、トゲトサカ類、クモヒトデ類、ウミシダ類、チョウチョウウオ、タカベ、ミノカサゴ、ホウライヒメジ、クマノミ、サンゴイソギンチャク、共生ハゼ、テッポウエビ類、スジオテンジクダイ、ウメイロモドキ、クマササハナムロ、オビシメ、アマモ、タツノオトシゴ、ハオコゼ、マイワシ、マアジ、マアナゴ、ウナギ、コウイカ、アオリイカ、ヒイラギ、マハゼ、イダテンギンポ、トビハゼ、ヤマトオサガニなど

維持種：キイロハギ、ツノダシ、ニセアライボヒトデ、アカハチハゼ、ノコギリハギ、ジンガサウニ、アカハタ、アカマツカサ類、イトヒキベラ、トサヤッコ、キサンゴ類、アカハラヤッコ、ニザダイ、ミツボシクロスズメダイ、イソギンポ、ボラ、アミメハギ、ゴンズイ、チャガラ、イボダイ、ホウボウ、タコノマクラ、サッパ、コノシロなど

検討種：①ヌノサラシ、シマウミヘビ、アオヤガラ、トビウオ類、キハッソク、オビテンスモドキなど
②カガミチョウチョウウオ、ヨソギ、ミナミゴンベなど

断念種：ノコギリダイ、スミレヤッコ、イスズミ、ソウシハギ、オニカサゴなど

▶重点的取組

○ズーストック計画に基づいたタツノオトシゴなどの計画推進及び頭足類などの繁殖技術の開発

○LED 照明などを使ったアマモの安定展示

○周辺の博物館施設などと協力した東京湾のトビハゼ調査とトビハゼの展示

○小笠原周辺海域における定期的なユウゼン調査と固有種を中心とした展示維持および世界自然遺産である小笠原諸島の自然についての普及啓発

【海鳥の生態エリア】

（主な施設・水槽）

海鳥の生態

▶飼育展示コンセプト

〇海を生活の重要な場所として暮らすエトピリカやウミガラスなど海鳥類を展示し、飛ぶことも水中を泳ぐこともできる姿を引き出す展示をおこない、ペンギンとの違いを伝える

〇絶滅危惧種に指定されている希少な海鳥の保全に関わる取組を、関係機関との連携・協力により推進するとともに、海鳥の置かれている危機的な状況や、保全の取組についても紹介する

▶主な飼育動物

優先種：エトピリカ、ウミガラス

維持種：なし

検討種：①ケイマフリ、ウトウ、ヒメウ、サケ科魚類、クロソイなど

②なし

断念種：なし

▶重点的取組

〇給餌方法の工夫により、水中で過ごす時間を増やし、野生本来の行動を引き出す展示

〇ケイマフリなど、新規展示種の導入の検討

〇これまでの海鳥の飼育で得られた知見を活かした、生息域内保全活動への積極的な協力

〇地元や大学、研究機関、漁業者等と連携した生息地での海鳥混獲防止の取組

海鳥の生態エリア

水中のウミガラス

【大洋の航海者エリア】

（主な施設・水槽）

大洋の航海者　マグロ

▶飼育展示コンセプト

○広い大洋を泳ぎ回ってくらす魚類を展示し、大洋での生活に適応した生物の多様な姿を伝える

○クロマグロの群れ展示を中心に、外洋性のサメ類などを展示し、広大な外洋を回遊するために発達した形態をはじめ、力強く生き生きと泳ぐ姿を見せる

▶主な飼育動物

優先種：クロマグロ、スマ、ハガツオ、アカシュモクザメ、ヨシキリザメなど

維持種：ウシバナトビエイ、ツマグロ、イワシ類、オキザヨリなどダツ類、シノノメサカタザメ、スミツキザメなど

検討種：①外洋性サメ類、バショウカジキ、その他のマグロ類、ボンネットヘッドシャーク、小型コバンザメ類、カマスサワラなど

②なし

断念種：ウミガメ類、マンボウ、オニイトマキエイ

▶重点的取組

○適正な年級群のクロマグロ導入による群れの形成・維持

○ヨシキリザメ、バショウカジキなど、外洋性魚類の継続飼育へのチャレンジ

○シノノメサカタザメ、イワシ類、オキザヨリなどの形態や、泳ぎ方などを比較する展示

クロマグロ

マグロ大水槽

【サンゴ礁の海エリア】

（主な施設・水槽）

サンゴ礁の海

▶飼育展示コンセプト

○水槽内にサンゴ礁を再現することで、サンゴ礁にくらす多様な生き物が相互に関係しあう姿を伝えるとともに、サンゴの飼育繁殖技術の知見を集積する

○地球温暖化の影響や、海洋の酸性化など、地球規模の環境変化によるサンゴ礁への影響を伝える

▶主な飼育動物

優先種：エンタクミドリイシ、スギノキミドリイシなど造礁性イシサンゴ類、デバスズメダイ、カスミチョウチョウウオなど

維持種：なし

検討種：①なし

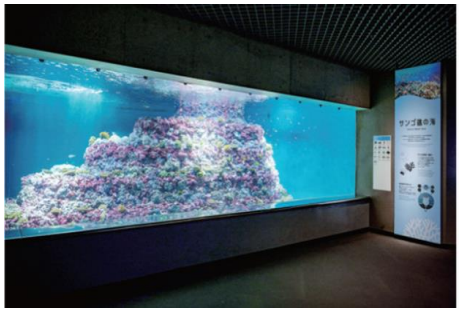
②なし

断念種：なし

▶重点的取組

○サンゴ類を中心とした展示における、サンゴを利用して生活している生き物の飼育展示

○ズーストック計画に基づいたサンゴ類の飼育繁殖の取組推進



「サンゴ礁の海」水槽

サンゴ礁にくらす生き物

【情報資料室・レクチャールームエリア】

（主な施設・水槽）

情報資料室、レクチャ―ルーム

▶飼育展示コンセプト

〇身近な生き物であるアカハライモリや小笠原の固有種である陸産貝類の展示を通して、生態や生息環境について学べる場を提供し、その保全の必要性を伝える

○スタッフが常駐しオリジナルビデオや生き物に関する資料、標本等を用意して、生き物についての質問応対や最新情報の提供を行う

▶主な飼育動物

優先種：アカハライモリ、アナカタマイマイ類

維持種：なし

検討種：①なし

②なし

断念種：なし

▶重点的取組

○保護増殖事業やズーストック計画などの取組に基づいた、他園や関連団体と連携した生息域外保全技術の確立と普及啓発

○来園者へ生き物の最新情報を提供するとともに、様々なワークシート等により、楽しみながら学ぶための新たな視点を提供する

○レクチャールームを活用し、講演会はじめ、団体ガイドなど、様々な学校団体等の利用を促進するとともに、普及啓発に取り組む

情報資料室

アナカタマイマイの展示

【ペンギンの生態エリア】

（主な施設・水槽）

ペンギンの生態

▶飼育展示コンセプト

〇温帯地域に生息するフンボルトペンギン・フェアリーペンギン、極地地域に生息するミナミイワトビペンギン・オウサマペンギンを比較展示し、それぞれの生態を紹介する

〇水中生活に適応した様々な特徴と、陸を歩く様子を観察することができる展示を通して、繁殖や保全の取組を紹介する

▶主な飼育動物

優先種：オウサマペンギン、ミナミイワトビペンギン、フンボルトペンギン、フェアリーペンギン

維持種：なし

検討種：①なし

②なし

断念種：なし

▶重点的取組

〇自然繁殖が困難な種の人工授精や、他園と連携したフェリーペンギンの有精卵移動・導入など、ズーストック計画に基づいた繁殖推進と新たな知見の集積

〇鳥インフルエンザ対策の強化

〇データロガーによる遊泳行動等の分析など、他機関と協力した知見の集積

ペンギンの生態エリア

オウサマペンギンの展示

【水辺の自然エリア】

（主な施設・水槽）

流れ、池沼、渓流、ため池、田んぼ、水辺の鳥

▶飼育展示コンセプト

〇東京に残された田んぼや里山環境、さらには河川環境を再現し、淡水の「上流域の渓流」、「中流域の様々な水の流れ」「流れのない池沼や下流域」について、それぞれの水辺環境の大切さと、そこに生息する生き物の多様性や人との関わり、絶滅が危惧されている現状を伝える

▶主な飼育動物

優先種：アカハライモリ、トウキョウサンショウウオほか東京産両生類、ゼニタナゴ、ミナミメダカクロモ、エビモ、ヒツジグサ、コウホネなど

維持種：二ホンコウノトリ、タンチョウ、クロツラヘラサギ、イシガメ、クサガメ、イワナ、ヤマメ、アブラハヤ、ボウズハゼ、ナマズ、ヤリタナゴ、ギンブナ、オイカワ、イシガイ類など、アサザ、ユキノシタ、ワサビ

検討種：①スッポン、アユ、シナイモツゴ、特定外来生物（ブラックバス、ウシガエルなど）など
②ウナギ、ゲンゴロウブナなど

断念種：カワネズミ、カジカ、ウグイ、ムサシトミヨなど

▶重点的取組

〇ズーストック種（東京産両生類やゼニタナゴ、ミナミメダカなど）の遺伝的多様性に配慮した累代繁殖

〇アカハライモリの域外及び域内保全活動の継続

〇水辺に生息する大型希少鳥類の生息域外保全への協力

水辺の自然エリア

淡水生物館

【移動水族園エリア】

（主な施設・水槽）

うみくる号、いそくる号

▶飼育展示コンセプト

〇様々な理由により、水族園に来園することが困難な方々が利用する病院、社会福祉施設等に、専用車両を用いて訪問し、海に暮らす生き物の生きた姿や海についての普及啓発活動を行う

▶主な飼育動物

優先種：チョウチョウウオ類、キンチャクダイ類、カクレクマノミ、クギベラ、ハリセンボン、ネコザメ、アカエイ、マアナゴ、マアジ、シロギス、イセエビ、イトマキヒトデ、マナマコ、ムラサキウニなど

維持種：テンジクダイ類、シマキンチャクフグ、クロホシイシモチ、オジサン、マツカサウオ、ミナミハタンポ、カワハギ、シマキンチャクフグ、ハナゴイ類など

検討種：①ハゼ類、マダコ、重要種以外のヒトデ・ウニ・ナマコ・カニ類など

②ヨスジフエダイ、アカヒメジ、ダルマガレイなど

断念種：キンギョハナダイ、イボダイ、ニザダイなど

▶重点的取組

〇移動水族園専属の生き物の適切な維持管理

〇生体や標本、模型等を活用したふれあい活動により、生き物の形態や動きへの理解を促す

移動水族館「うみくる号」

活動の様子

本計画に該当する確認指標・具体的な確認項目及び目標値一覧

	確認指標	具体的な確認項目	10年目目標値 （令和12年度）
取組１	来園者の視点で常設展示や施設の魅力が向上した	展示改善の実施件数	170件※1
	魅力的なプログラム、イベントが開催されている	利用者アンケートの調査結果	3.3
取組２	多くの来園者が魅力を感じて訪れる施設になっている	年間来園者数	700万人 （４園合計※2）
	多様な来園者を呼び込む取組がなされている	Twitter投稿件数	―※3
取組３	誰もが快適に観覧できる環境を提供している	快適環境に向けた園内施設の維持管理実施件数	1600件※1
	来園者が満足している	利用者アンケートの調査結果	3.6
取組４	地域への動物関連情報の提供が行われている	他団体との連携企画、地域イベント等の実施件数	12件
取組５	多くの方に積極的に都立動物園や野生動物の情報を発信している	東京ズーネット投稿件数	100件
	園内外でICTなどの先端技術を活用した情報発信がされている	動画新規配信件数（ズーネットBB、YOUTubeチャンネル）	1800件※1 （4園合計※2）
取組６	飼育職員による情報発信が強化されている	キーパーズトークの実施件数	900件
	動物園を案内するガイドツアーのプログラムが充実している	ガイドツアーの実施件数	600件
取組７	動物をテーマにした特設展・企画展が充実している	特設展・企画展の実施件数	3件
	東京都(伊豆諸島・小笠原諸島含む)に分布する野生動物に関する情報発信が強化されている	東京都に分布する野生動植物に関するズーネット投稿件数	110件※1 （4園合計※2）
取組８	園外のフィールドにおいて動物の魅力を伝えるプログラムを実施し、身近な野生動物への理解を促している	フィールドプログラムの実施件数	11件
	来園が困難な方などへの環境学習プログラムが充実している	団体プログラムの実施件数及び葛西臨海水族園の移動水族館の実施回数	75件
取組９	将来の保全の担い手となりうる人材を育成している	教員セミナーの実施件数	3件
	教育的な効果が高い団体指導プログラムを実施している	学校団体向けプログラムの実施件数	400件
取組10	ボランティアの育成が進んでいる	ボランティア対象の研修会の実施件数	17件
	ボランティアとの協働による教育活動が行われている	ボランティアによる教育活動の実施件数	420件
取組11	希少種の飼育管理を適正に行い、繁殖が推進されている	国内外血統登録対象の繁殖種数	6種※1
	多様な種を飼育し、飼育個体の情報を適正に管理している	国内外血統登録対象の飼育種数	10種
取組12	計画的な飼育展示に向けた取組が進んでいる	飼育展示計画に基づいた飼育種数	219種
	種の保存のために繁殖貸借(ブリーディングローン)が行われている	繁殖貸借（ブリーディングローンの実施件数）及び 保護増殖計画における動物受入実施件数	3件
取組13	ズーストック種の繁殖が進んでいる	ズーストック計画で計画どおり繁殖に成功した種数	124種※1
	ズーストック計画に基づき対象種が適切に維持管理されている	ズーストック種における「飼育繁殖」「保全情報」「普及啓発」の分野において、適切に推進されている取組数	378※1
取組14	飼育動物の選択肢を増やし、正常な行動を引き出し、健康的に飼育する取組が進んでいる	展示施設におけるエンリッチメントの取組件数	―※3
取組15	環境省の保護増殖事業計画対象種の保全に貢献している	種の保存法に基づく保護増殖事業計画の確認を受けている種数	13種 （５園合計※4）
	生息地における保全活動や環境学習活動が推進されている	生息域内保全に貢献した活動の実施件数	20件 (4園合計※2)
取組16	飼育・繁殖・環境学習等の技術継承のための場が用意されている	園内の研究会実施件数	11件
	飼育・繁殖・環境学習等の技術や研究成果が広く公表されている	研究成果の公表件数	160件※1
取組17	大学・研究機関との共同研究により新たな知見が得られている	共同研究の実施件数	140件※1
	野生動物保全の取組の必要性を広く発信している	講演会・シンポジウムの実施件数	7件
取組18	飼育繁殖に生物工学技術が活用されている	DNA分析、ホルモン測定の実施種数	70種 (5園合計※4)
	動物園の個体群の維持に生物工学技術が活用されている	配偶子の凍結保存及び使用件数	610件※1 （５園合計※4)
取組19	国内外の動物園・水族館、大学、研究機関とのネットワークが強化されている	国内外の動物園・水族館、大学、研究機関等との協定締結件数	10件 （４園合計※2)
	飼育繁殖技術や展示の魅力向上のために、国際的な連携が進んでいる	海外との連携の中で行われた、会議・学会等への参加件数、動物交換、研修などの実施件数	5件
取組20	野生動物保全活動への支援が行われている	(公財)東京動物園協会の野生生物保全基金による年間助成件数	10件 （４園合計※2)
	動物園が所有する野生動物を研究に活用することで野生動物の保全に貢献している	研究材料の提供件数	30件※1

※1 10 年目までの累積件数
※2 建設局所管の都立動物園・水族園
※3 新たな取組や、過去の十分な実績値の記録がないなど、現時点で適切な目標値の設定が困難な項目。取組状況を検証した上で目標値を設定する。
※4 建設局及び環境局所管の都立動物園・水族園

５．教育普及計画

（１）教育普及計画とは

「目指す姿ごとの方針」の、主に「魅せる」、「伝える」で定めた方針に基づき、どのような環境学習や利用促進などの取組を行うかを定めています。園の特色に沿った園内プログラムや展示を行うために、飼育展示計画で定めた展示コンセプトや取組とも関連する内容とし、両計画を相互に連携するものとして位置付けています。

策定にあたっては、（公財）東京動物園協会が令和２(2020)年１月に策定した教育普及事業方針を踏まえた内容としています。

本計画により、全ての来園者が動物園・水族館に魅力を感じ、楽しみながら野生動物や保全について知ることができる取組の実施を目指します。

（２）教育普及テーマについて

教育普及計画では、動物園・水族館における教育普及の取組内容を、①～⑩の分類（以下、「教育普及テーマ」という）し、これら教育普及テーマごとに、取組計画と主な実施項目を記載しています。

教育普及テーマ	
【いつでも楽しく学べる場】	① 定例の教育普及プログラムの強化
	② 動物と間近に接する体験（動物介在教育）の充実
	③ 展示での学びのサポート強化
【誰もが楽しめる場】	④ 集客力のある教育普及プログラムの強化
	⑤ 長期的で深い学び、また専門性の高い学びの充実
	⑥ 誰も取り残さない教育普及活動の推進
【動物の未来を考える場】	⑦ 環境学習プログラムの充実とズーストック種を活用した情報発信の強化
【学校での学びをサポートする場】	⑧ 学校向けの動物観察プログラム・キャリアプログラム・各種教材の充実
【多様なネットワークのハブとなる場】	⑨ ボランティアとの協働を推進、地域との連携強化
【情報発信の拠点となる場】	⑩ 多様な情報発信ツールを利用した効果的な情報発信

（３）園の教育普及コンセプト

葛西臨海水族園の教育普及計画で目指す方針を、以下のとおり「園の教育普及コンセプト」として定めます。

○　生きものの科学的観察をとおした、体験的かつ能動的な学びにより、海や淡水環境への興味や関心を高め、科学的理解を深めます。「人と生きものと水」の関係を結びなおし、伝え、紡いでいくことを目指します。

○　幅広い年代の来園者向け、また学校団体向けのきめ細やかな教育プログラムを展開し、年齢別、学年別など個々のターゲットにあわせた、楽しく深い学びを提供します。また、特別支援学校など障害のある方、水族園への来園が難しい方も含めた誰もが学べる場を提供します。

○　東京湾を臨み、ラムサール条約登録湿地に近接する立地を活かし、地元や周辺施設と連携しながら、海の恵みや環境を、都民に伝えるプログラムを推進していきます。

○　生きものの魅力だけではなく、生物多様性の重要性やその現状を、積極的に伝えます。水環境や、そこに暮らす生き物の現状を自分ごととととらえ、未来を考え、行動する人を育てることを目指します。

（４）教育普及テーマごとの計画　～取組計画・主な実施項目～

【いつでも楽しく学べる場】

動物園・水族園に訪れる人々が、いつでも楽しく学べる場であるために、園内で実施する定例の教育普及プログラムや、動物と間近に接する体験を提供する、教育普及活動を強化します。また、展示の一部である展示サイン、さらに企画展・特設展、セルフで楽しめるクイズシートなど、プログラム等に参加できない来園者にも、常に新たな学びを提供します。

① 定例の教育普及プログラムの強化

▶取組計画

水槽前でのスポットガイド・ガイドツアーを通して、展示前での学びをサポートします。また、スタッフが常駐する情報資料室では、最新のみどころ情報を伝えるとともに、標本や専門書を使用して来園者の疑問・質問に対応します。

▶主な実施項目

〇ガイドツアー
〇バックヤードツアー
〇水槽前でのスポットガイド（飼育係、東京シーライフボランティアーズ）
〇エサの時間ガイド
〇情報資料室機能の充実

② 生物と間近に接する体験（動物介在教育）の充実

▶取組計画

磯生物の触察プログラム（しおだまり）や、実験展示での発光実験等は、アニマルウェルフェアに配慮したより効果的な内容に改善するとともに、触察に変わる新たな体験型展示等の、魅力的なプログラムを開発・実践します。また、多様な体験型プログラムにも、触察も含めた間近に接する体験を通した学びを導入します。

▶主な実施項目

〇しおだまり（磯の生き物）プログラム
〇発光実験等の実験ガイド
〇「イキモノマヂカ」の整備、プログラム開発・実践
〇アニマルウェルフェアに配慮したふれあい活動のさらなる検討・開発

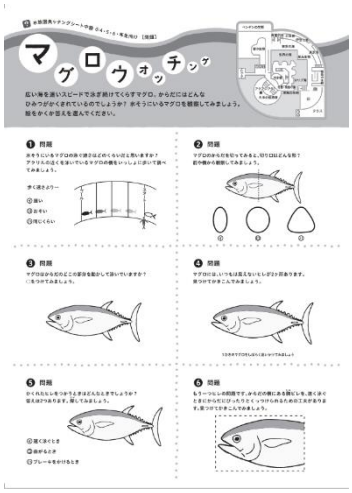
③ 展示での学びのサポート強化

▶取組計画

展示での情報提供のベースとなる、種ラベルの記載内容に保全情報を盛り込むとともに、水槽上の映像情報など、展示周辺の情報を充実させます。また、セルフガイドシートやイベントにあわせたクイズラリーなど、来園者自身が楽しく学べるツールを強化します。

▶主な実施項目

〇種ラベルの更新
〇水槽上映像情報の展開検討
〇セルフガイド（魚ッチング）シートの多言語化、情報資料室での配布
〇シーライフニュース（機関誌）
〇開園記念日等にあわせたクイズラリー



セルフガイドシート（マグロ）

水族園の機関誌となっている
「シーライフニュース」

【誰もが楽しめる場】

動物園・水族園には子どもから大人、障害がある方、訪日外国など、多様な人々が訪れます。来園した誰もが楽しめる場所であるように、対象と狙いが異なる様々な教育普及プログラムを充実させていきます。また、こうした取組を通じ、より多くの方を呼び込んでいきます。

④ 集客力のある教育普及プログラムの強化

▶取組計画

多様な来園者を呼びこむために、夏季の開園時間延長プログラムや開園記念日イベントなど、誰もが気軽に参加でき、楽しく学べる教育活動を展開します。これらのプログラムにはオンラインの多様な手法も取り入れ、より多くの人に生物の魅力を伝える工夫をします。

▶主な実施項目

〇ナイトオブワンダー（夏季の時間延長プログラム）
〇開園記念日プログラム
〇ディープオブワンダー（深海生物をテーマにしたプログラム）
〇バレンタインデー・ホワイトデーにあわせたスイートツアー（繁殖戦略の紹介）

⑤ 長期的で深い学び、また専門性の高い学びの充実

▶取組計画

幼児から大人まで、幅広い来園者に実物による体験的な学びを提供するため、多種多様な年齢別プログラムを企画・実施しながら、より効果的な学習プログラムのために改善を重ねます。プログラムの実施においては、オンラインも活用して、より多くの人に学びの場を提供します。

▶主な実施項目

〇進め！海のいきものたち（幼児対象）
〇いきものことはじめ（小学 1・2 年生対象）
〇海のあそびや（小学 3・4 年生対象）
〇集まれ！汐っこ（小学 5・6 年生対象）
〇海の学び舎（高校・大学生対象）
〇東京の海を知（親子対象）
〇トビハゼ観察会（親子対象）
〇保全プログラム「水辺の生き物保全講演会」（一般対象）

⑥ 誰も取り残さない教育普及活動の推進

▶取組計画

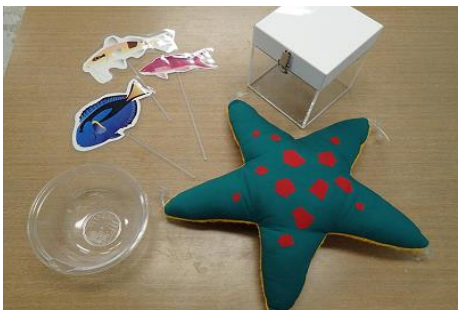
特別支援学校や盲学校向けのプログラムを強化するとともに、障害者施設や高齢者施設を訪問する移動水族館活動を改善しながら継続し、誰もが利用できる水族園を目指します。また、国内外の多様な来園者の来訪に備え、職員の語学研修を行うとともに、情報サインや印刷物の多言語化を進めます。

▶主な実施項目

〇ドリームナイト・アット・ザ・アクアリウム
〇地域の特別支援学校・盲学校等との連携
〇移動水族館活動　専門家によるプログラム評価改善
〇解説サインの多言語化
〇ICT を活用した事業の取組強化

ナイトオブワンダー（観察ポイント紹介パネル）

トビハゼの生息地を実際に訪れる
トビハゼ観察会


さまざまな状況の方に対応できるように
工夫を凝らした解説道具
（移動水族館）

水がこぼれる心配のない密閉水槽
（移動水族館）

【動物の未来を考える場】

動物園・水族園は、地球上の動物とわたしたち人が共に生きる未来のために、学び、考え、行動する場です。その入口となる、自然体験へつなげるフィールドプログラムを強化するとともに、希少野生動物の保全に貢献する、対象やテーマを工夫した多様な教育普及プログラムを充実させます。

⑦ 環境学習プログラムの充実とズーストック種を活用した情報発信の強化

▶取組計画

「いきもののミカタ」プロジェクトを柱に、海や淡水の水辺環境の現状を積極的に情報発信し、わたしたちができることを共に考え、行動できる人の育成を目指します。また、東京湾に面する立地を活かし、身近な水辺環境の重要性を、フィールドの楽しさとともに伝えます。さらに、水族館ならではの環境学習プログラムとして、水産研究・教育機構等と連携した漁業・食育をテーマにしたプログラム、海洋プラスチックやライフサポートシステムをテーマにしたプログラム、SDG's を意識したメニューやギフトの開発に取り組みます。

▶主な実施項目

〇各プログラムでの「いきもののミカタメッセージ」の発信
〇バックヤードツアー　水族園のライフサポートシステム（水の浄化）
〇東京の海を知る（フィールド観察会）
〇水辺の生き物保全講演会
〇漁業・食育をテーマにしたプログラムの開発・実践
〇MSC 認証を用いたレストランメニューの開発、環境に配慮した事業活動（ペーパーレス、FSC 認証の紙など）

環境に配慮した事業活動（間伐材コースター）

【学校での学びをサポートする場】

学校教育との連携は、動物園・水族園の大切な取組の一つです。幼児から大学生まで年齢や学年に沿った体系的な教育普及プログラムを充実させ、学校教育との連携を強化します。

⑧ 学校向けの動物観察プログラム・キャリアプログラム・各種教材の充実

▶取組計画

学校団体向けの、年齢・学年別の多様なプログラムを評価改善しながら継続し、学校の希望に沿ったオリジナルプログラムも実施します。また、中高生向けのキャリア教育や大学生向けの実習等を継続し、環境学習の担い手の育成に貢献します。さらに、学校の授業に役立つ多様な教材を、学校の ICT 利用に合わせて開発すると共に、教員向けのセミナーを実施し、学校での理科教育・生物教育に協力します。

▶主な実施項目

〇動物観察や保全等をテーマにした団体向けプログラム
〇職場体験・職場訪問・インターンシップ等のキャリア教育支援プログラム
〇博物館実習・飼育実習等の実習受け入れ
〇授業に活かせる「動物園・水族園」講座
〇授業に役立つ動画教材（パッケージ化）

特別支援学校向けプログラム「ふれて観察」

教員を対象とした講座の開催

【多様なネットワークのハブとなる場】

ボランティアとの協働を推進するとともに、動物園・水族園が中心となって、様々な教育・文化施設や、鉄道事業者など、周辺の施設や企業との連携を強め、効果的な教育普及活動を推進します。

⑨ ボランティアとの協働を推進、地域との連携強化

▶取組計画

来園者により近い立場である、ボランティアとの協働を推進し、ボランティアによる情報発信を強化します。また、周辺地域と連携し、東京湾の生物や自然環境の情報発信拠点となるべく、フィールドでの調査研究や教育活動に取り組むと共に、地域の観光拠点として水族園の魅力を広く伝えていきます。

▶主な実施項目

〇東京シーライフボランティアーズによる水槽前スポットガイド
〇東京シーライフボランティアーズとの研修会・連絡会の開催
〇地元自治体との連携（地元開催イベント等への参加）
〇周辺商業施設、団体、企業との連携

東京シーライフボランティアーズによるスポットガイド

海鳥に関する保全や普及活動などを共同で行っている羽幌町の物産展を開催

【情報発信の拠点となる場】

動物園・水族園は、動物や自然環境に関連する情報発信の拠点として、多様な情報発信ツールを活用し、効果的な情報発信を行います。

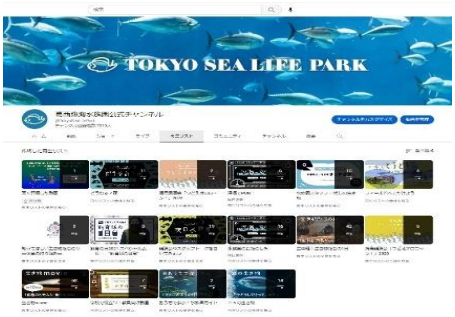
⑩ 多様な情報発信ツールを利用した効果的な情報発信

▶取組計画

Twitter、Instagram、YouTube など、多様な情報発信ツールを活用し、生き物や自然環境についての積極的な情報発信を行い、多様な来園者を呼び込むことに繋げます。また、それらの情報をデジタルアーカイブとして蓄積し、様々な教育プログラムに活用していきます。

▶主な実施項目

〇ホームページ（ズーネット）での情報発信
〇マスメディアを活用した広報活動
〇プレスリリースや取材対応
〇Twitter、YouTube での情報発信
〇デジタルアーカイブの蓄積



葛西臨海水族園公式 YouTube チャンネル

親子向けオンライン体験ツアー
「おいしい魚　サケとマグロのひみつをさぐれ！！」

本計画に該当する確認指標・具体的な確認項目及び目標値一覧

	確認指標	具体的な確認項目	10年目目標値 （令和12年度）
取組１ （再掲）	来園者の視点で常設展示や施設の魅力が向上した	展示改善の実施件数	170件※1
	魅力的なプログラム、イベントが開催されている	利用者アンケートの調査結果	3.3
取組２ （再掲）	多くの来園者が魅力を感じて訪れる施設になっている	年間来園者数	700万人 （４園合計※2）
	多様な来園者を呼び込む取組がなされている	Twitter投稿件数	―※3
取組３ （再掲）	誰もが快適に観覧できる環境を提供している	快適環境に向けた園内施設の維持管理実施件数	1,600件※1
	来園者が満足している	利用者アンケートの調査結果	3.6
取組４ （再掲）	地域への動物関連情報の提供が行われている	他団体との連携企画、地域イベント等の実施件数	12件
	自治体等の地域と連携した取組が進んでいる	地元警察・消防と連携して行った訓練の実施件数	2件
取組５ （再掲）	多くの方に積極的に都立動物園や野生動物の情報を発信している	東京ズーネット投稿件数	100件
	園内外でICTなどの先端技術を活用した情報発信がされている	動画新規配信件数（ズーネットBB、YOUTubeチャンネル）	1800件※1 （4園合計※2）
取組６ （再掲）	飼育職員による情報発信が強化されている	キーパーズトークの実施件数	900件
	動物園を案内するガイドツアーのプログラムが充実している	ガイドツアーの実施件数	600件
取組７ （再掲）	動物をテーマにした特設展・企画展が充実している	特設展・企画展の実施件数	3件
	東京都(伊豆諸島・小笠原諸島含む)に分布する野生動物に関する情報発信が強化されている	東京都に分布する野生動植物に関するズーネット投稿件数	110件※1 （4園合計※2）
取組８ （再掲）	園外のフィールドにおいて動物の魅力を伝えるプログラムを実施し、身近な野生動物への理解を促している	フィールドプログラムの実施件数	11件
	来園が困難な方などへの環境学習プログラムが充実している	団体プログラムの実施件数及び葛西臨海水族園の移動水族館の実施回数	75件
取組９ （再掲）	将来の保全の担い手となりうる人材を育成している	教員セミナーの実施件数	3件
	教育的な効果が高い団体指導プログラムを実施している	学校団体向けプログラムの実施件数	400件
取組10 （再掲）	ボランティアの育成が進んでいる	ボランティア対象の研修会の実施件数	17件
	ボランティアとの協働による教育活動が行われている	ボランティアによる教育活動の実施件数	420件
取組11 （再掲）	希少種の飼育管理を適正に行い、繁殖が推進されている	国内外血統登録対象の繁殖種数	6種※1
	多様な種を飼育し、飼育個体の情報を適正に管理している	国内外血統登録対象の飼育種数	10種
取組13 （再掲）	ズーストック種の繁殖が進んでいる	ズーストック計画で計画どおり繁殖に成功した種数	124種※1
	ズーストック計画に基づき対象種が適切に維持管理されている	ズーストック種における「飼育繁殖」「保全情報」「普及啓発」の分野において、適切に推進されている取組数	378※1
取組14 （再掲）	飼育動物の選択肢を増やし、正常な行動を引き出し、健康的に飼育する取組が進んでいる	展示施設におけるエンリッチメントの取組件数	―※3
取組17 （再掲）	大学・研究機関との共同研究により新たな知見が得られている	共同研究の実施件数	140件※1
	野生動物保全の取組の必要性を広く発信している	講演会・シンポジウムの実施件数	7件
取組19 （再掲）	国内外の動物園・水族館、大学、研究機関とのネットワークが強化されている	国内外の動物園・水族館、大学、研究機関等との協定締結件数	10件 （４園合計※2）
	飼育繁殖技術や展示の魅力向上のために、国際的な連携が進んでいる	海外との連携の中で行われた、会議・学会等への参加件数、動物交換、研修などの実施件数	5件

※1 10 年目までの累積件数
※2 建設局所管の都立動物園・水族園
※3 新たな取組や、過去の十分な実績値の記録がないなど、現時点で適切な目標値の設定が困難な項目。取組状況を検証した上で目標値を設定する。